

序

周知のように、1300年前、奈良県橿原市には、日本の首都「新益京」があった。藤原京と呼ばれ、今も、大和三山に囲まれた藤原宮の大極殿跡に立てば、周囲の景観は、往時の面影を残している。近世以来、その所在地、範囲については激しい論争が行われてきた。昭和40年代初頭、発掘成果をもとに、京域の範囲についての結論が出たかにみえた。だが、その後、推定京域の外から次々と京内を示す証拠が現れた。

近年、橿原市の都市開発による景観の変貌は著しく、市内の随所で発掘による排土の盛山の光景を見ることがある。平成8年には市内の西北で、京域の東西の端とすることも可能な遺構が見つかり、広大な京の範囲が判明したとする見解もある。

我々の調査部は、本来、宮内の調査と主とするものであるが、時には開発に伴う発掘調査にも柔軟に対応してきた。現在の京の調査は、大路、小路の側溝を発掘することに終始することが多い。

こうした古代都市の上に、商業活動をされるについて、応分の協力を願うことになっているが、株式会社邦清もこれに協力され、遺跡を記録に残すことになった。都市の研究は広範囲に及ぶため、こうしたデータの積み重ねによって究明される。遺跡が消滅することは、大変残念なことであるが、この報告書は藤原京の1地点のパズルとして重要や役割を果たすことに違いない。

1997年3月

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

猪熊兼勝